

映画「劔岳 点の記」感動のクランクアップ

映画「劔岳 点の記」は1年半の撮影を終えて7月24日ようやくクランクアップ(撮影終了)を迎えた。

昨年4月に木村監督が実景撮影に立山連峰に入り、9月に俳優さんが入っての第一次ロケ、そして今年3月から第二次ロケを開始し、延べ200日という長期間の山岳ロケをやり遂げて、このたびのクランクアップだった。

木村監督は「ぼくは嬉しいです。俳優さんと話したが、スタッフも含めてこれに参加した全員がバカですね。この映画は単なる映画とは思っていない。人生の苦行に参加したようなものだ」と長い忍耐と苦闘の末のクランクアップに感慨を語っていた。

最終ロケは、室堂にベースキャンプをおいた柴崎測量隊が、豪雨の中にドロドロになりながら小屋を解体して撤収するシーンと、撤収の雨の中に陸地測量部からの電報を読む芳太郎の姿など4、5カットが撮影された。昼過ぎから開始された撮影は、5時過ぎまでか

かった。

撮影のために、地元立山町の消防のポンプ車5台が協力、それにロケ隊のポンプ合わせて15本のホースからの放水で暴風雨のシーンが再現されていた。

監督の「水はなんぼでもあるから、全部出せーっ!!」の号令で、一斉放水。「そっちのホース3本固まりすぎだろー!! もう1回っ!!」

監督の「カット!!」の声まで何度も何度も水量を調節したり、角度を変えたり。

その間スタッフは常願寺川に腰まで浸かりっぱなし。雪解けの川の水の冷たさを知っている地元の人たちからは同情の声もしきりだった。

俳優さんも、「リハーサル」「音入れ」「本番」と出番と待機を繰り返し、編み笠と蓑姿はずっと乾く間もない。

撤収する小屋が、監督の思う通りにうまく倒れず、大道具さんがもう一回小屋を組み立てて最初からやり直し始めたのにはびっくりしたが、俳優さんたちは「こんなの普通です」という顔

だった。この映画はそういうものなのだろう。

夕暮れが迫り、「終わりっ!! 終わりっ!!」と監督が万歳のように両手を挙げると、俳優さん、スタッフ関係者がお互い握手し合い、抱き合い、長かった撮影の労をねぎらう姿が見られた。誰もが笑顔だった。そして、みんなの胴上げが繰り返された。

この映画の撮影は、美しくも厳しい大自然を撮っていくために、劔岳、立山連峰のオールロケーションが敢行された。その分、作り物ではないリアルな自然の映像が迫力を持って画面一杯に広がるのが見どころだ。

山岳会の小島烏水役を演じた仲村トオル氏は「撮影した映像があまりにキレイなので、これを見た人は合成だと思わないのではないか。あれを合成だと思われないようにすることができると思ったら、それが俺らの仕事だよね」(本誌8月号)と語るほど、俳優さんが雄大な自然美にのみ込まれないよう奮立



豪雨シーンのための大放水



ベースキャンプ解体シーン



雨が降る中の撤収作業のシーンを撮り終えて、まだ濡れたままコメント取材に応じた芳太郎以下測量隊の面々。
左から、蟹江一平さん(山口久右衛門)、螢雪次朗さん(宮本金作)、松田龍平さん(生田 信)、浅野忠信さん(柴崎芳太郎)、
香川照之さん(宇治長次郎)、モロ師岡さん(木山竹吉)、仁科貴さん(岩本鶴次郎)、木村大作監督。

つ、という入れこんだ役作りは楽しみといえる。

クライマックスの登頂シーンは、7月13日に最初のアタックがなされたらしい。監督は何時間も天気図をにらみ、決行日を探ったという。しかしその日は、朝8時半まで晴れていたが、そのあと霧になった。登っておしまいというのではない。撮影隊は登るシーンと撮影しなくてはならない。測量隊と同じである。天気図を見て監督は「本日決行とした。僕の誕生日でもあるし」。それで俳優さんたちは、勇んで登頂した。頂上まで3時間を切って登ったらしい。しかし「僕が遅かった。それで霧になった」と監督は詫げる。

再起を決した17日、撮影隊は未明3時半に出発して6時半にはスタンバイ

した。これで待ちかまえたわけだ。俳優さんたちは、4時に出て、追いかけたそうだ。この日に撮影は成功した。

ロケ中に、監督が天気図を何時間もにらむ傍らで俳優たちは語り合ったそうだ。劔岳の大自然の中で。

浅野さんは「われわれはもしかして、劔岳に奇跡的に生かされているのではないのだろうか？ この状況では、龍はゼツタイいるし、天狗が本当に出てくるのではないかと思えてくる」と香川さんと語っていたそうだ。肉体の疲労極限まで追い込まれ、巨大な岩が、森が俳優さんたちを取り込む劔岳の状況は、異界への入り口を体験させるものなのかと想像した。

香川さんが「これは映画のストー

リー性がどうの、ドラマツルギーがどうのという映画ではないのではないのか。日本の映画でこんなのは見たことがない。世界遺産みたいな映画だ。毎日命懸けだった。これを若い俳優・スタッフに言葉にして伝えていくのがわれわれ年配者の使命です。この映画を実現した木村監督には頭が下がる」と語っておられたのが強く印象に残った。

監督、俳優さん、スタッフの方々、本当にお疲れ様でした。心よりお礼申し上げ、映画公開に向けて精一杯応援をしていきたいと思ひます。

(文・写真 本誌編集事務局 浦郷武夫)

※7人の測量隊を演じた俳優さんのコメントは、当協会ホームページ「劔岳点の記コーナー」をご覧ください。